多田銀銅山

猪名川町教育委員会

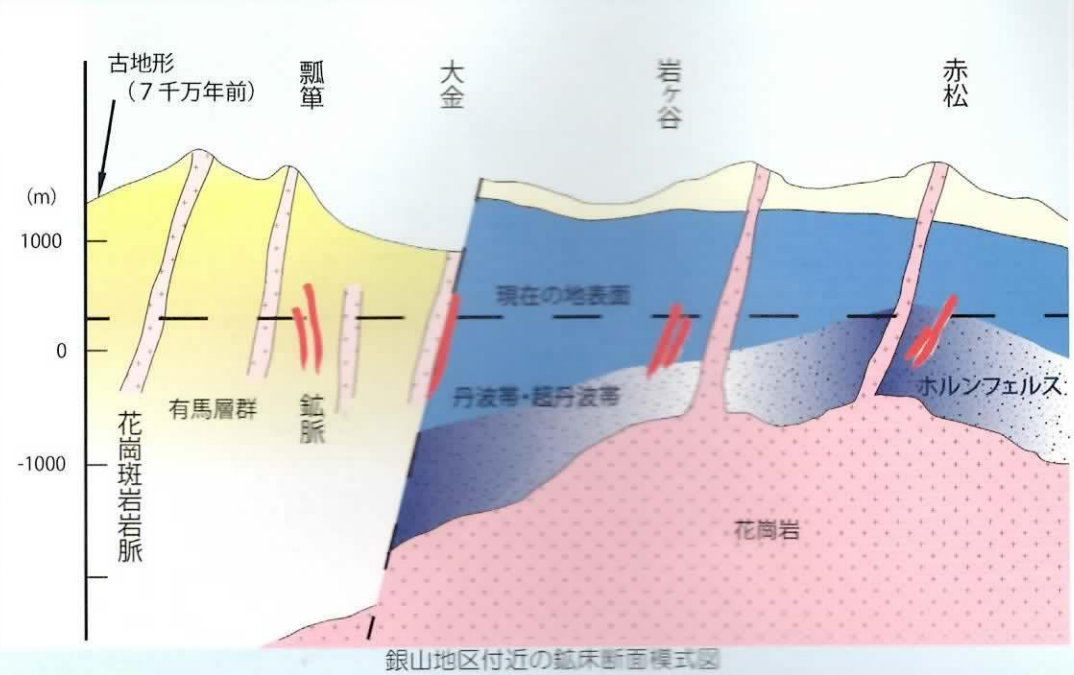
多田銀銅山について

地質と鉱床

今からおよそ７千万年前（白亜紀後期）に、西日本の広い範囲で花崗岩マグマが上昇しました。

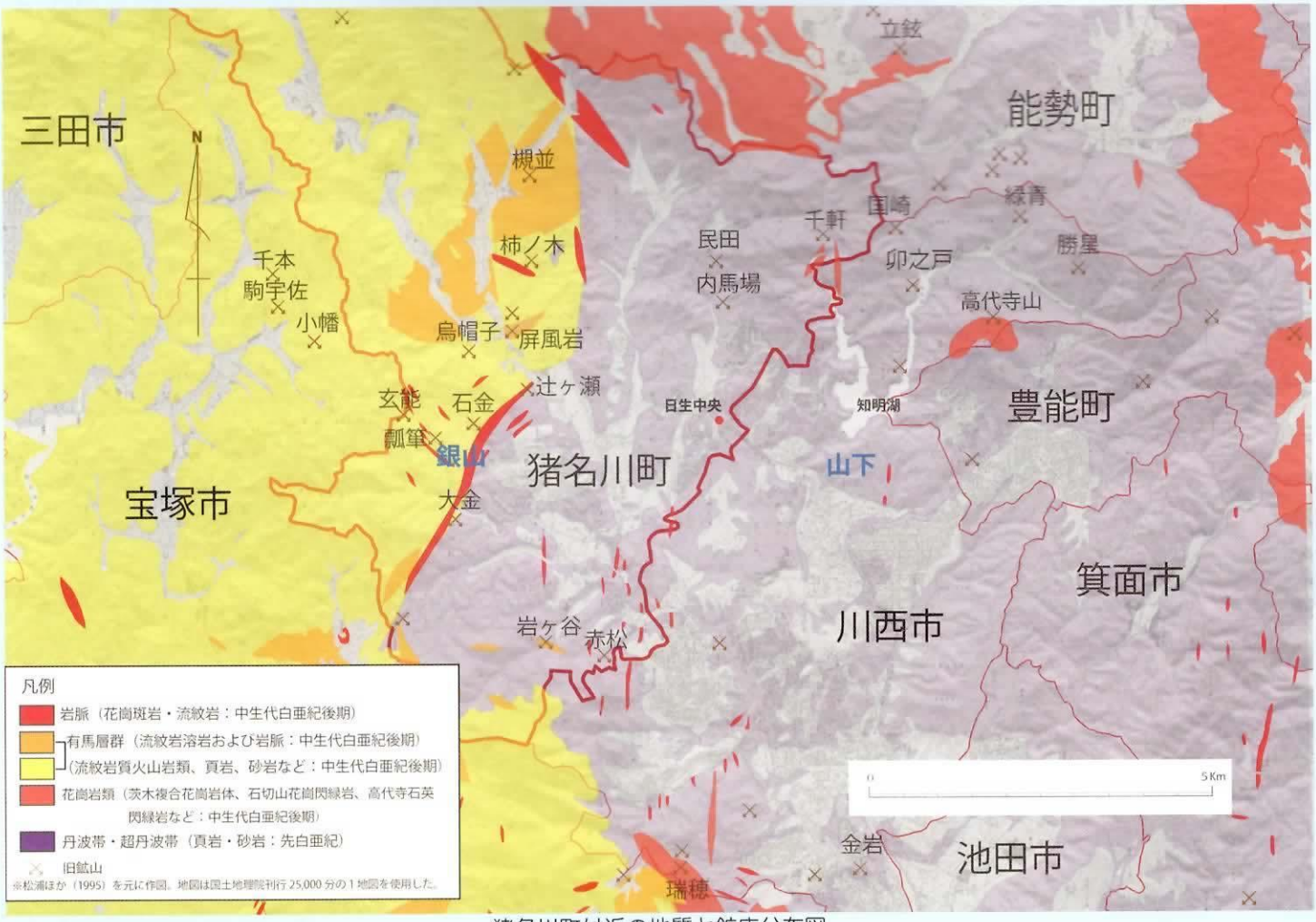
これによって、大規模な火山活動があり、銀や銅の鉱床がつくられました。なかでも猪名川町の銀山とその周辺に、たくさんの鉱脈が生成しました。鉱脈は火山岩（有馬層群）と堆積岩（丹波帯・超丹波帯）の中あるいは境界部などにみられます。

下の図はこの様子を模式的に示した断面図と鉱床の分布図です。



銀山地区付近の鉱床断面模式図

ホルンフェルス・・・貫入した花崗岩の熱によって変化した岩石のこと。ホルンフェルスがあると、現在の地表面下の浅いところに花崗岩が潜在していることを示しています。



猪名川町付近の地質と鉱床分布図

多田銀銅山の範囲

多田銀銅山は猪名川町、川西市、宝塚市、大阪府池田市、箕面市、能勢町、豊能町一帯に広がる鉱床群の総称です。

「多田」という地名は源満仲が開いた「多田荘」に因んでいると考えられており、豊臣秀吉の財産目録である慶長３年（1598）の『伏見蔵納目録』には「多田荘銀山」と記されています。

江戸時代には、「多田銀山」「多田銅山」「多田銀銅山」などと呼ばれるようになります。

「多田銀銅山」は場所を示すとともに、生産体制、鉱山などの管理を含めた江戸時代の支配体制の中でうまれた地域の総称です。

多田銀銅山の鉱脈の範囲

多田銀銅山の主な歴史

奈良時代

奇妙山（川西市国崎周辺、現在の一庫（ひとくら）ダム付近）から採れた銅を奈良東大寺の大仏鋳造（ちゅうぞう）に献上したという伝承があります。

平安時代

天禄元年（970）、源満仲に金瀬五郎が銀山地区の金懸間歩（かなかけまぶ）で採れた銀を献上した伝説があります。また、長暦元年（1037）に摂津国から銅の献上が行われた（『壬生（みぶ）家文書』）と記され、この時期の前後に能勢採銅所（大阪府能勢町付近）が設置されたと考えられています。

猪名川町域での採掘開始年代については明らかではありませんが、能勢採銅所の管理のもと槻並（つくなみ）では採掘が行われていたこと、鎌倉時代には多田院御家人の管理のもと銀山を含む広根地域で採掘が行われていたと考えられます。

戦国時代～安土桃山時代

豊臣秀吉により銀山地区の鉱山が開発され、瓢箪（ひょうたん）間歩、台所間歩を中心に銀銅を産出しました。付近の紺青（こんじょう）間歩では、岩絵具の顔料となる紺青を産出しました。

江戸時代

江戸時代前半から幕府の直轄地でしたが、寛文元年（1661）に銀山地区の大口間歩で銀を含む良質な鉱脈が発見されたのを契機として、翌年の寛文２年（1662）に代官所が置かれ、幕府から代官が派遣されました。しかし、20年後の天和２年（1682）に代官が追放された後、代官は派遣されず役人のみが詰める役所として明治２年（1869）に廃止されるまでの約200年間、多田銀銅山の鉱山管理と支配にあたりました。

明治時代

山師が実業家の援助のもと、鉱山経営をしました。明治10年代には神戸の実業家関戸慶治、明治20年（1887）には三菱へと経営が変わります。明治２６年(1893)に島根県の鉱山家堀藤十郎の手に渡り、採鉱量の増加に伴い明治40年(1907)に西洋技術を取り入れた機械選鉱場の建設を計画し着工しましたが、完成をみないうちに休止します。

昭和時代

昭和36年（1961）に日本鉱業（株）が「多田鉱業所」を設置し、昭和41年（1966）に本格的に採掘を開始しますが、採算量に見合わず、昭和48年（1973）に閉山しました。

多田銀銅山ゆかりの人々

多田銀銅山には、歴史上の有名な人物が訪れています。人物と多田銀銅山（多田銀山）とのかかわりをまとめてみました。

多田源氏、銀を目的で多田銀山開発か！？

源満仲（みなもとのみつなか）
912年？～997年
延喜12年？～長徳3年

平安中期の武将。清和源氏の祖。

摂津国多田を本拠地として、多田院（現多田神社）を創建、多田荘を開発した。

銀山には天禄元年（970）、金瀬五郎が銀を採掘し、満仲に献上したとの伝承がある。

多田銀山が大坂の台所を支えた！！

豊臣秀吉（とよとみひでよし）
1536年～1598年
天文5年～慶長3年

安土桃山時代の武将。織田信長の死後、天正18年（1590）に天下統一を果たす。

大坂城を築城し、関白・太政大臣に任ぜられ、陽成天皇より豊臣姓を賜る。

多田銀山を開発し、台所間歩、瓢箪間歩では大坂の財政を潤すほどの銀銅の産出量があったといわれている。

冷泉家当主、多田銀山を見物！！

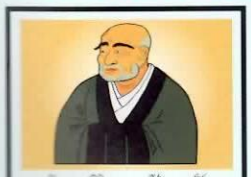
冷泉為満（れいぜいためみつ）
1559年～1619年
永禄2年～元和5年

安土桃山時代の公家。冷泉家第9代目当主。

天正16年（1588）に冷泉為満が多田銀山を訪れたとの記録がのこっている。

冷泉家は、代々歌人の家として現在まで伝統を引き継いでいる。

多田銀山の紺青石を狩野派絵師が使用！！



狩野山楽（かのうさんらく）
1559年～1635年
永禄2年～寛永12年

安土桃山時代の狩野派絵師。本名は木村平三光頼。豊臣秀吉に仕え、狩野永徳の弟子となり、活躍する。

天正14年（1586）に秀吉から多田銀山で産出する紺青石（こんじょうせき）（青色の顔料）の採掘権を与えられた。

江戸時代の大人気作家も注目！！

井原西鶴（いはらさいかく）
1642年～1693年
寛永19年～元禄6年

江戸時代の浮世草子作家・俳人。

代表作は『好色一代男』『日本永代蔵』。

元禄元年（1688）発刊『日本永代蔵』に多田の銀山（かなやま）の屏風絵を婚礼の品として作らせる逸話があり、当時多田銀山が全国的に知られていたことがわかる。

あの大発明家も多田銀銅山に注目！！

平賀源内（ひらがげんない）
1729年～1779年
享保14年～安永8年

蘭学・地質学・本草学など幅広い知識をもった江戸時代中期の人物。

長崎で医学・本草学を学ぶ。多田銀銅山へは明和9年（1772）、長崎留学からの帰りに立ち寄り、現地で水抜普請を行ったが、産出量の減少を止めることはできなかった。

江戸時代の多田銀銅山

■銀の時代から銅の時代へ

多田銀銅山では、江戸時代初期から元禄時代までは銀を主に生産していましたが、18世紀以降になると、銅の生産が中心になります。

江戸時代の史料をみると「多田銀山」「多田銅山」「多田銀銅山」と出てきますが、産出した時代によって名称を変えてきたともいえます。

■多田銀銅山の鉱山管理・支配体制

寛文元年（1661）の代官所設置時には京都代官であった中村杢右衛門之重が銀山奉行として派遣されますが、天和2年(1682)に追放されました。その後、京都代官所【享保6年（1721）まで】、大坂代官所【天明4年（1784）まで】、大津代官所【文政4年（1821）まで】、高槻藩預かりと変遷していきます。

多田銀銅山内では元禄元年（1688）に山下町（川西市山下町）にも役所が設置され、山元（採鉱する場所）での製錬を禁止し、多田銀銅山での製錬は銀山町と山下町の2カ所で行うようになりました。

代官の変遷

期間	代官	所属
元和元(1615)～	長谷川忠兵衛藤継	摂津国代官
寛永2(1625)～	中村杢右衛門之重	京都代官・銀山奉行
天和2(1682)～	今井七郎兵衛好親	京都代官
天和3(1683)5～	万年伝兵衛頼旨	京都代官
元禄3(1690)6～	設楽喜兵衛正秀	京都代官
元禄7(1694)6～	長谷川六兵衛安定	京都代官
元禄16(1703)8～	古川武兵衛氏成	京都代官
正徳元(1711)～	古川武兵衛氏成	京都代官
	吉川岡右衛門	京都代官
正徳3(1713)8～	町野惣右衛門	京都代官
正徳4(1714)～	鈴木丸太夫正当	京都代官
享保6(1721)8～	平岡彦兵衛良久	大坂代官
享保14(1729)9～	千種清右衛門直豊	大坂代官
寛保元(1741)～	池田喜八郎季隆	大坂代官
寛保3(1743)10～	千種清右衛門直豊	大坂代官
	渡辺民部	大坂代官
寛保3(1743)11～	奥谷半四郎直救	大坂代官
寛延2(1749)～	小川新右衛門盈長	大坂代官
宝暦6(1756)～	萩原藤七郎友明	大坂代官
宝暦11(1761)6	内藤十右衛門	大坂代官
	飯塚伊兵衛英長	大坂代官
宝暦11(1761)6～	飯塚伊兵衛英長	大坂代官
明和5(1768)～	辻六郎左衛門富森	大坂代官
安永7(1778)～	万年七郎右衛門頼行	大坂代官
天明4(1784)～	石原清左衛門正範	大津代官
寛政7(1795)～	石原庄三郎正通	大津代官
文政4(1821)11～	石原清左衛門正修	大津代官
天保11(1840)5～	(高槻藩預り)	
天保14(1843)5～	築山茂左衛門	大坂代官
天保15(1844)2～	(高槻藩預り)	

□ 銀山に着任した代官
銀山着任期間　寛文元年（1661）～天和2年（1682）

銀山町の絵図

江戸時代、銀山町を描いた絵図は複数のこされていますが、そのなかでも銀山地区全体の様子がわかる絵図はこれまで３種が確認されています。

銀山町間歩絵図（町内寺院蔵）

サイズ：縦１３１ｃｍ、横１９９ｃｍ
製作年代：不明
景観年代：寛文年間（１７世紀）

絵図の製作年代は不明ですが、代官所の対岸に設置された柵や20年間設置された口固番所などの役所関連施設が描かれていることから、銀山最盛期の寛文年間前後に描かれたものと考えられます。

彩色が鮮やかであること、銀山町からみた近隣の村の位置関係が示されていること、また筆致から専門の絵師によって描かれたと推定されます。

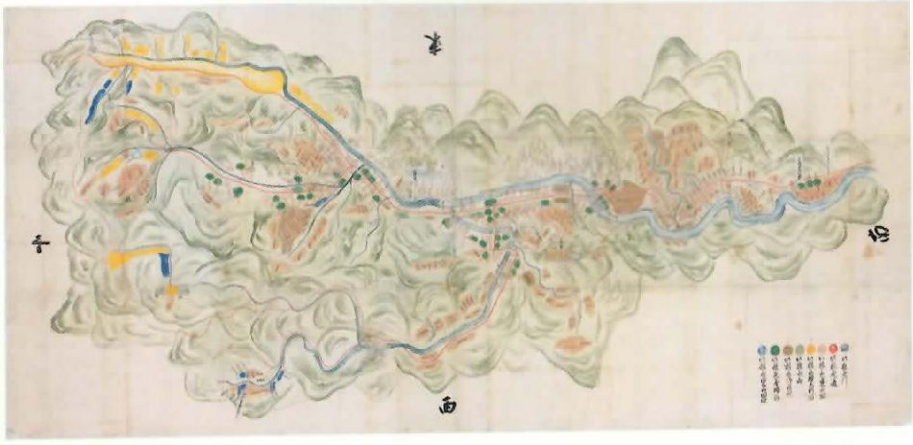
柵内銀山町御用地略絵図（個人蔵）

サイズ：竪帳１１頁、つなぎ合わせると縦２５ｃｍ、横１７２ｃｍ
製作年代：１９世紀中頃
景観年代：寛文年間（１７世紀）

幕末の役人、秋山良之助の記録の巻頭にある絵図で、筆致から秋山良之助自身によって描かれたものと推定されます。代官所などの施設が豪壮、華麗に描かれすぎているところがありますが、絵図には代官所（役所）、口固番所、間歩などの諸施設名や町名が記されており、絵図に含まれる情報が多いことが特徴です。

銀山町行政絵図（銀山町検地付近絵図）（個人蔵）

サイズ：縦１０８ｃｍ、横２２８ｃｍ
製作年代：１８世紀以降、延享２年（１７４５）以前
景観年代：１８世紀以降



銀山町で初めて検地が行われた延享２年（1745）前後に製作された絵図と考えられます。役所は描かれていますが、すでに廃止された口固番所は描かれていません。

絵図の右下には凡例が示されており、畠・田・新田・屋敷跡など種別ごとに色分けされています。

また、それぞれの土地に石高や所有者を記した台帳と照合するための番号が記されています。

絵図には間歩が描かれていませんが、銀山町と周辺の山中に田畑があったことがうかがえます。

銀山地区の遺跡の性格

詳細分布調査から代官所（役所）が置かれていた江戸時代の遺跡（遺構）を中心に数多くのこされていたことがわかりました。銀山町で確認された遺跡は様々な性格を持っていますが、これらの遺跡を４つに分類することができます。

①役所関連遺跡…代官所（役所）、口固番所など

寛文２年（１６６２）、代官所とともに銀山町の出入り口４カ所に口固番所（大坂口、滝口、田原口、奥山口）が設置されました。

口固番所は代官が詰めていた天和２年（１６８２）までの約２０年間設置されていましたが、代官所はその後、鉱山を管理する役所として明治６年（１８７３）まで多田銀銅山（銀山町および銀山付村）の支配を行いました。

②生産遺跡…採鉱跡（間歩など）、選鉱、製錬遺構など

銀や銅の採掘を行った遺構、選鉱遺構、製錬遺構など銀山地区で銀銅の生産を行ったあとです。鉱脈に沿って採鉱場が設けられ、露頭掘や鏑追掘、鉱脈に直交する坑道掘のあとがのこっています。初期には採鉱場の付近で製錬が行われていますが、銀山町に専業の吹屋も生まれています。寛永の初期から南蛮吹による銀銅の吹き分け技術が用いられていることが特徴です。

代官所設置後、製錬は銀山町の吹屋に集約され、銀銅鉛の生産が明治初期まで続きました。

③生活遺跡…集落、寺社、田畑など

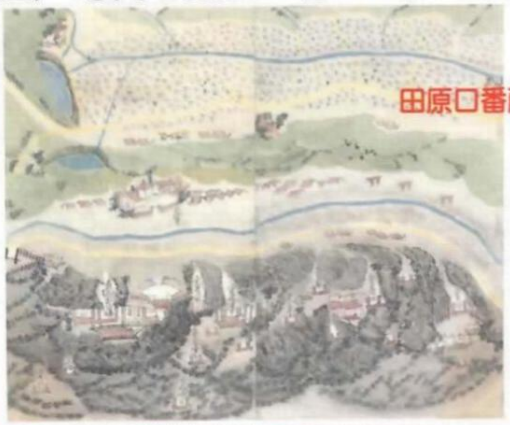
銀山町で採掘・製錬に関わった人々の暮らし、信仰などを明らかにすることができる遺跡です。平地の少ない銀山町では、谷筋に住居が建てられています。銀山各地には神社、寺院跡が確認されましたが、なかでも鉱山の神様を祀る「金山彦神社」は、建築様式から江戸時代最盛期の寛文年間に建立されたことがわかりました。

また、銀山町の周辺にある田畑から、鉱山での生活だけではなく、生業も兼ねていたことがわかりました。

④流通遺跡…道、道標など

「銀山町」では集落と間歩、田畑を結ぶ道、銀山町外へ通じる道が確認されました。江戸時代には銀山町周辺の村で産出した鉱石、製錬に必要な炭などの燃料が銀山に運ばれ、銀山で生産された銀銅は大坂に運ばれ、一部は御用銅として棹銅に鋳造され長崎から輸出され、残りは国内消費に向けられました。灰吹銀は吹屋が京・大坂の銀座や下買人などへ自由に売りさばいていました。街道にある道標から銀山町と周辺の村との関わりを知ることができます。

江戸時代の銀山の様子（柵内銀山町御用地略絵図）



役所関連遺跡

代官所跡（北側から）

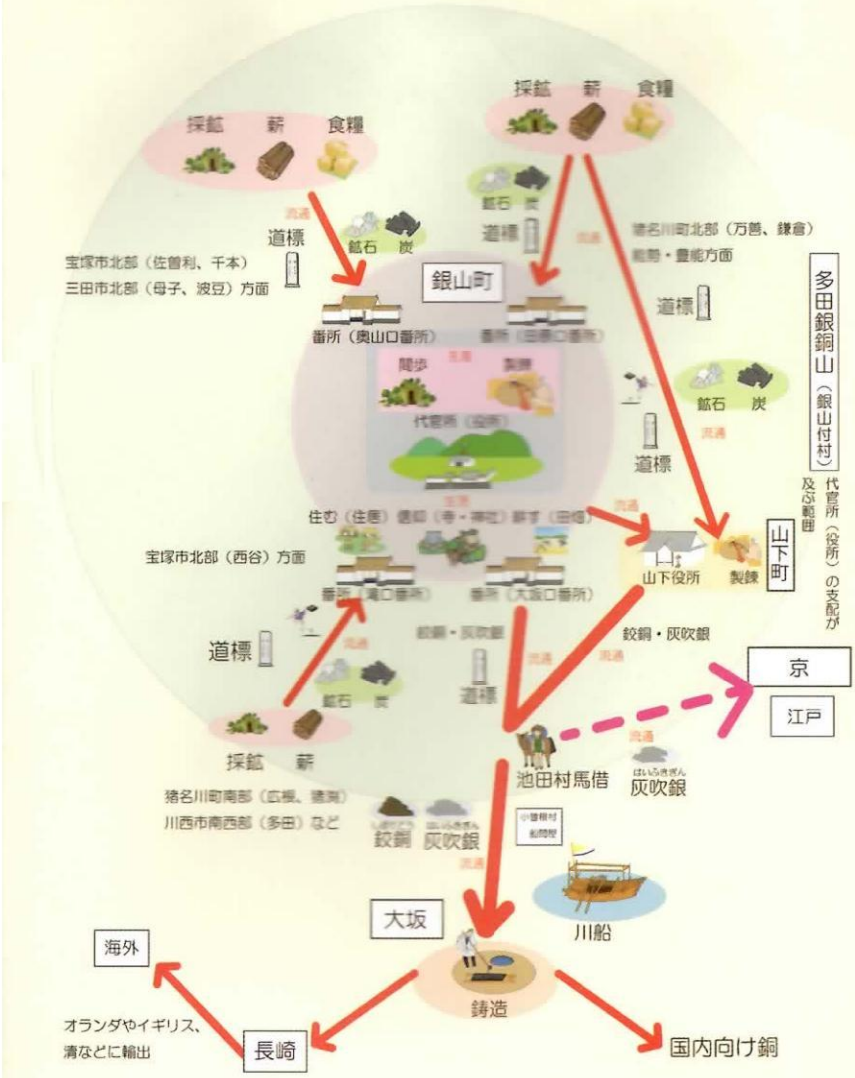
生産遺跡

山中にある間歩

※危険なので間歩の中には勝手に立ち入らないでください。

集落

本町のまちなみ（北側より）



江戸時代の多田銀銅山　（銀山町と銀山付村）と周辺地域の関係図

多田銀銅山遺跡詳細分布調査

【平成１８～２２年度（2006～2010）実施】

銀山地区の遺跡詳細分布調査では、４頁に掲載した３種の絵図を参考にしながら銀山地区を踏査し、遺跡や遺構の分布状況を調べました。

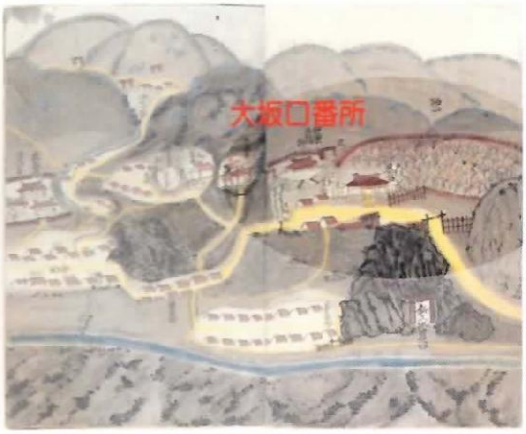
調査の結果、銀山地区には石垣や平坦面、間歩など多くの遺構が確認され、絵図との照合から遺構の性格が判明しました。

分布調査風景

寛文（1661-1673）の頃は銀が重要で、銀は京都の銀座に納められていたようです。

元禄の頃（17 世紀末）から銅の生産が重要になり、多田で製錬した銀銅は大坂に運ばれ、さらに銅の一部は御用銅として長崎から海外に輸出されました。

その後 18 世紀後半には、多田の銅は大坂に運ばれ国内向けに販売されました。



生活遺跡

信仰

金山彦神社本殿（覆屋入り）

生業

村上新田（南より）

流通遺跡

旧道

大坂口旧道

道標

「ぎんざん」への道標
才ノ神峠（大阪府能勢町）
の道標、寛文11年（1671）

役所関連遺跡の調査

多田銀銅山代官所（役所）

万治３年（１６６０）に大鉱脈の発見を契機に寛文元年（１６６１）には幕府の直山（じきやま）となり「銀山町」が置かれました。京都代官だった中村杢右衛門之重が「銀山奉行」として着任し、寛文２年（1662）に代官所（現在の「悠久の館」の対岸）と４ヵ所の口固番所が設置されました。

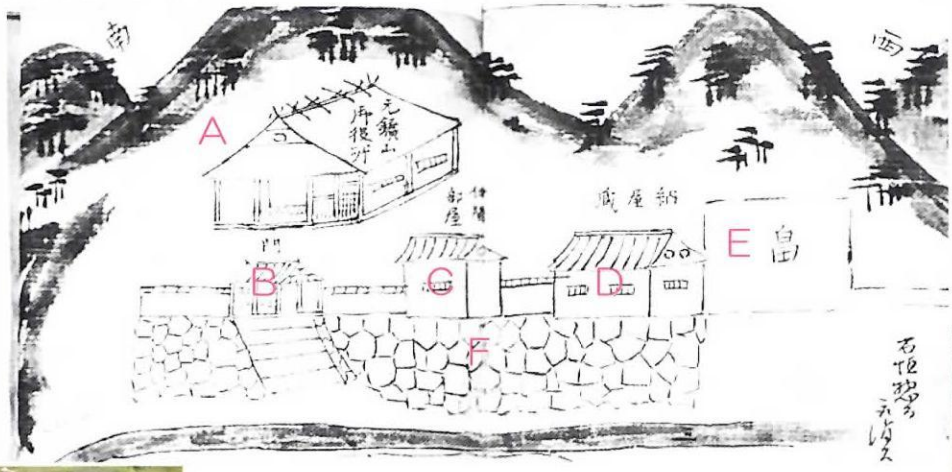
天和２年（１６８２）に中村杢右衛門之重が追放された後、代官は派遣されず、銀銅の産出量の減少とともに役人の数を減らすなど、徐々に規模を縮小していきました。明治２年（1869）に廃止されるまでの約２００年間、この代官所（役所）が多田銀銅山と銀山付村を支配、管理にあたりました。

代官所跡の調査（平成 12 ～ 17 年度調査実施）

銀山役所最後の役人秋山良之助が編纂（へんさん）した記録などから、代官所は文化１２年（1815）に全焼し、文政３年（1820）に再建されたことがわかっており、のこされた絵図面から寛文２年（1662）の代官所設置当時の建物配置と異なることがわかっています。

発掘調査の結果、建物跡や階段跡などの遺構が確認されました。これらの遺構は明治６年（1873）に銀山戸長（江戸時代の庄屋層）から兵庫県令（現在の知事）に提出された『元鉱山御役所御払下ケ御願』に描かれている建物配置とほぼ一致することがわかりました。また、安政５年（1858）に山師の援助を得て役所を修復した際の石垣も確認されました。

明治時代には、代官所（役所）の周囲の山は採鉱場となり、代官所（役所）跡は選鉱・製錬を行う作業場として利用されたことがわかりました。



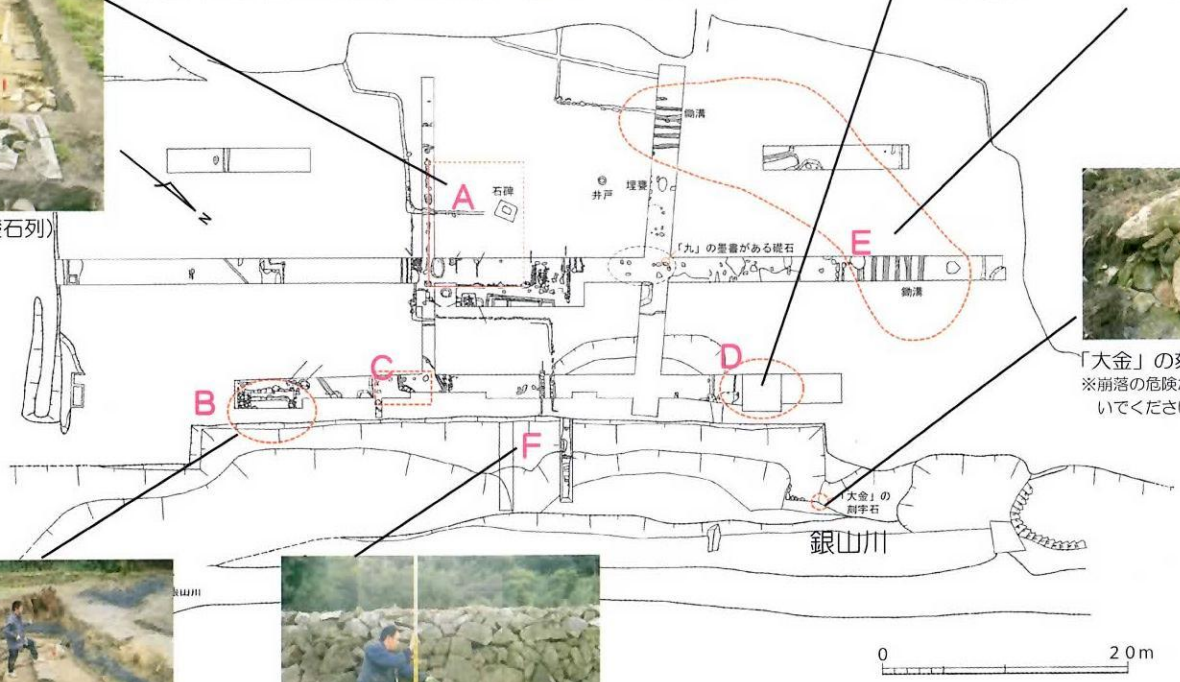
『元鉱山御役所御払下ケ御願』（個人蔵）に描かれている最後の役所の様子

代官所跡でみつかった明治時代の炉跡

納屋蔵跡

畑跡（鋤溝跡）

建物跡（礎石列）



「大金」の刻字がある石垣
※崩落の危険があるため、近寄らないでください。

階段跡

石垣跡（積み直し部）

『元鉱山御役所御払下ケ御願』からの様子（上）と代官所跡

発掘調査時の遺構平面図（下）のA～Fの記号は同一施設を示す。

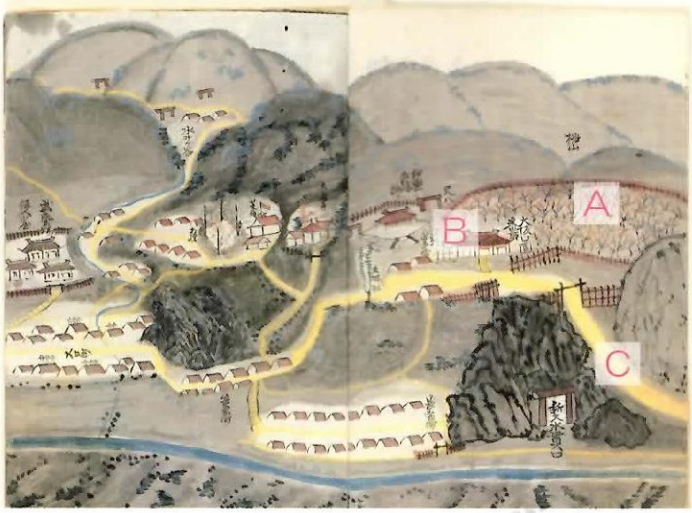
多田銀銅山代官所跡　発掘調査　遺構平面図

大坂口番所

大坂口番所は寛文２年（1662）に代官所とともに設置された４つの口固番所のひとつで、大坂、池田町、伊丹町の出入口として銀山町の東南部に設置されました。大坂方面の入口にあたるため、最も重要な口固番所として位置づけられました。番所では銀山町に入る商品価格に応じて「十分の一口銀」を取り立てるとともに、大坂口番所付近にあった芝居、角力（相撲）、傾城町などの娯楽施設でも口銀を取り立てました。

天和２年（1682）の代官追放に伴い、大坂口番所を含む４つの口固番所は廃止されましたが、その後に製作された絵図（『銀山町行政絵図』）から畑地として利用されたと考えられます。

発掘調査では役所建物跡、土塁状の高まり跡、木戸跡などの遺構が出ました。この遺構の様子は幕末の役人、秋山良之助が製作した『柵内銀山町御用地略絵図』に描かれた様子と一致することがわかりました。このことから秋山良之助は銀山最盛期に作られた絵図を参考にしながら絵図面を描いたと考えられます。

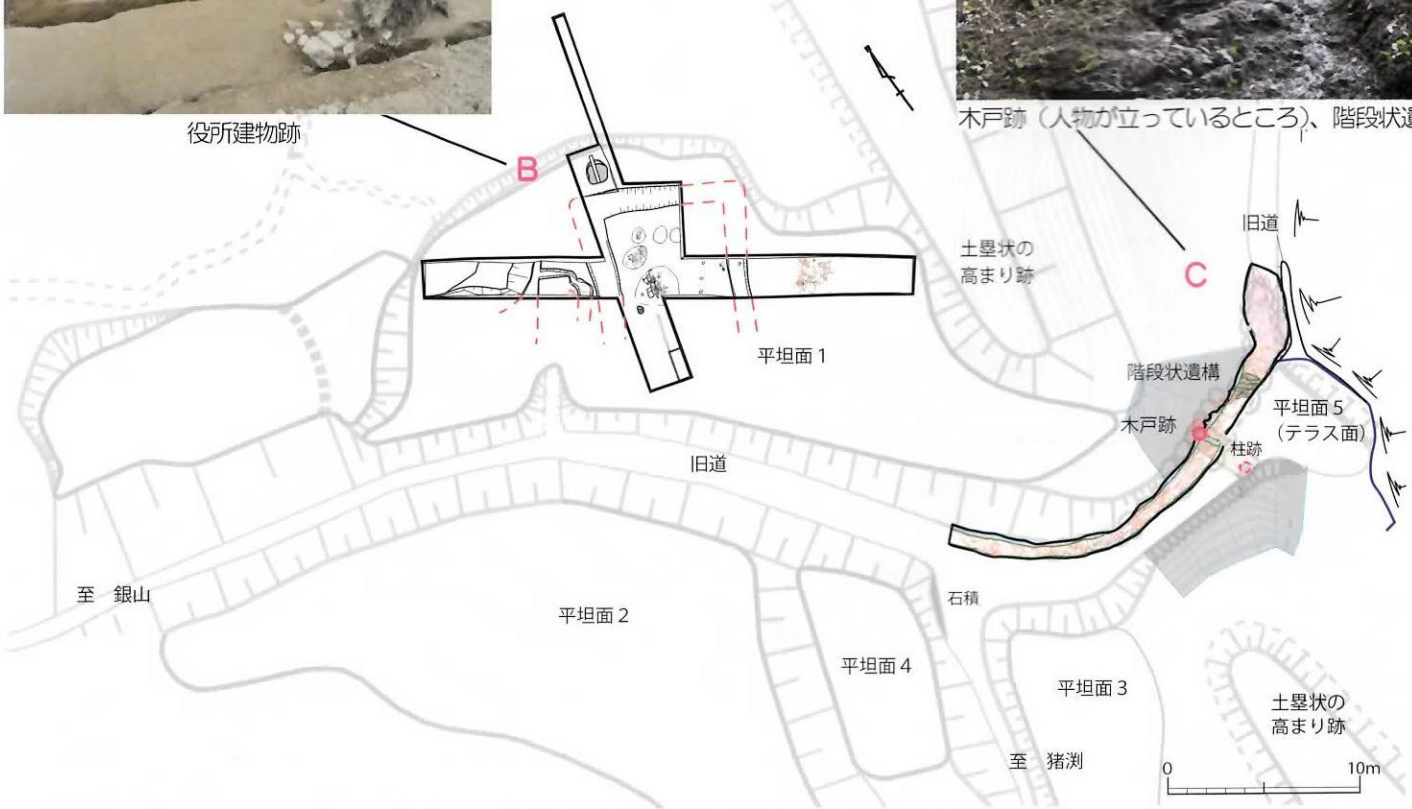


『柵内銀山町御用地略絵図』（部分）

土塁状の高まり跡と役所建物敷地跡

木戸跡（人物が立っているところ）、階段状遺構

役所建物跡

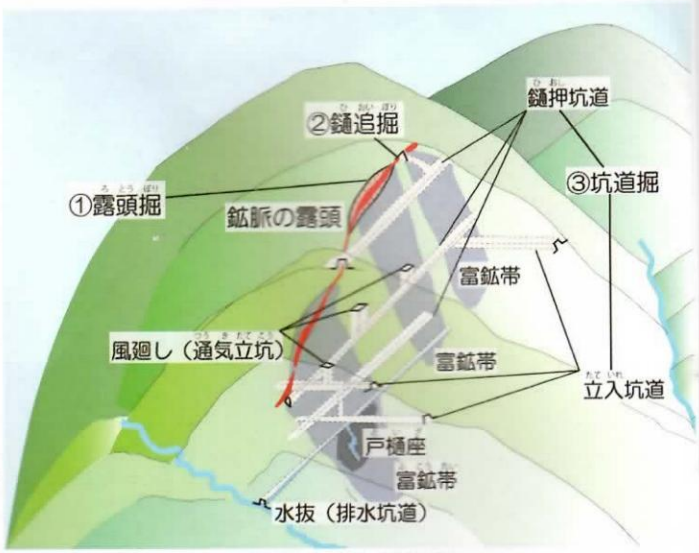


大坂口番所跡周辺の地形および遺構平面図

生産遺跡の調査

採鉱

鉱脈は均質ではなく、銀や銅が多く含まれる富鉱帯と乏しい部分（低品位部）があります。前近代の鉱山は地表に現れている鉱脈の富鉱帯を溝状に掘る溝掘や下方に掘り下がる竪穴掘などの「露頭掘」から始まりました。崖を作って鉱脈露頭がある場合は壁面掘によって富鉱帯が採掘され、低品位の鉱脈が壁面として残ります。こうした露頭掘は、鉱脈を追って地中に不規則に掘り下がる「鏻追掘」に移行します。採掘技術が進むと、地中の鉱脈を水平に掘り進む「坑道掘」が行われるようになります。坑道には鉱脈に沿って掘り進む「鏻押坑道」と鉱脈に直交する「立入坑道」があります。



鉱脈と採鉱法の関係図

銀山地区では３つの採鉱法が確認できます。

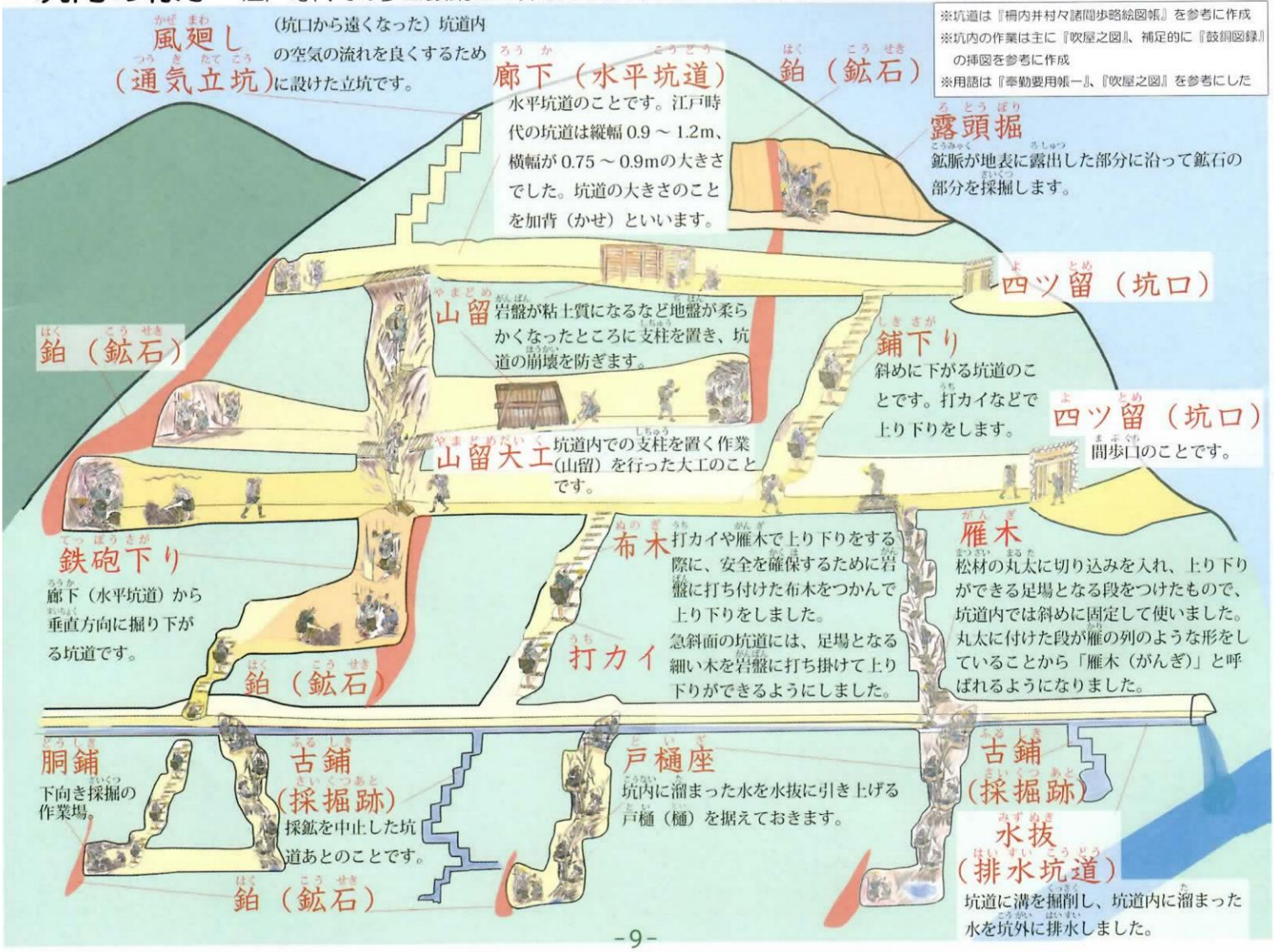
①鉱脈の露頭と露頭掘（壁面掘）

②鏻追掘

③坑道掘

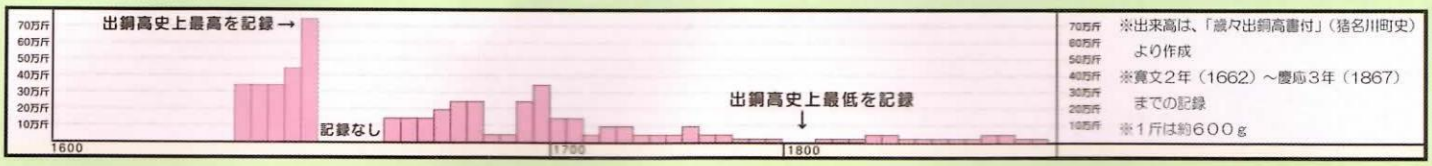
坑内の様子

江戸時代での多田銀銅山の採鉱は絵図や文書から読み取ることができます。



多田銀銅山の銅の産出量

多田銀銅山では、代官所が設置された寛文２年（1662）以後の銅の産出量の記録がのこされています。寛文４年（1664）には、銅の産出の最高記録を出しますが、以後、その量は減少の一途をたどります。なお、銀の産出量は銅の産出量の１～２％であると考えられます。



銀山での作業工程とその様子

採掘と選鉱、製錬の様子は、『吹屋之図』と『摂州多田銀銅山鉛石吹立次第荒増』に図解されています。この２つの史料の内容は同一のものとわかりました。

採掘（掘る）

坑内で鉱石を掘り、坑外へ出す。

選鉱（選る）

鉱石を選別し、銀や銅を含む部分を取り出す。

製錬（熔かす）

鉱石を熔かして不純物を取り除く。

銀の抽出

鉛に含まれる銀を灰吹により抽出する。

上図は『吹屋之図』（九州大学総合研究博物館蔵）からの引用

製錬の工程

江戸時代の文献によると、多田銀銅山では古くから「南蛮吹」が行われていたようで、寛永９年（1632）、多田銀銅山の製錬技法が生野銀山に伝えられたという記録がのこされています。当時、多くの鉱山が「荒銅」の状態で大坂へ出荷するなか、多田銀銅山は製錬を更に進めた「鉸銅」（抜銀銅）の状態で大坂へ出荷していました。

多田銀銅山では、元禄元年（1688）、山下役所の設置に伴い、これまで各山々で行われていた山吹（製錬）が禁止され、銀山町と山下町の吹屋での製錬に限られるようになります。

①鉛焼

選鉱した鉱石（鉛）を焼竈で約６～７日焙焼し、鉱石の硫黄分を減らします。（図の表題は「焼竈」）

『摂州多田銀銅山鉛石吹立次第荒増』

多田銀銅山での製錬工程を記した文書。銀山役人の秋山良之助が作者と考えられています。文書は製錬に使用される道具と製錬工程の説明図の二部構成になっています。

『摂州多田銀銅山鉛石吹立次第荒増』に描かれた「吹屋の図」

銀山地区にあった吹屋（個人）

絵図に描かれた製錬施設『柵内銀山町御用地略絵図』（「本町」部分）

②鉛吹

鉛鉱石を熔かし、鉛を生産します。

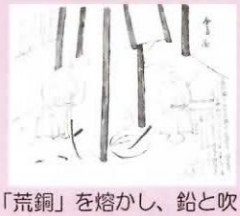
③素吹

焼いた鉱石を熔かし「鈹」（まだ硫黄と分離されていない銅）を取り出します。

④真吹

「鈹」を熔かし、空気を送り、硫黄を酸化させて銅（荒銅）を生産します。

⑤合せ吹



「荒銅」を熔かし、鉛と吹き合わせます（合せ銅）。「荒銅」に含まれている銀は鉛と結合します。

⑥南蛮吹

合せ銅を加熱し、銀を含んだ鉛を熔かし出します。銅と鉛の融解温度差を利用した工程です。

⑦灰吹

南蛮吹で分離した鉛から銀を抽出します。炉の中に灰を詰め、そこに鉛を置き、炭で加熱熔融します。空気を送ると鉛は酸化し、灰に吸い込まれます。灰の上には、純銀が残ります。

多田銀銅山の主な歴史

時代	西暦（和年号）	できごと
奈良	742（天平14）	奇妙山神教間歩（川西市域）より東大寺大仏鋳造の銅を寄進（伝承）…銅山の始まり
平安	970（天禄元）	金瀬五郎、金懸間歩で採れた銀を源満仲に献上（伝承）…銀山の始まり
鎌倉	1211（建暦元）	能勢郡に採銅所（『壬生家文書』より） ※「壬生家」とは、国の重要な文書を管理していた家のこと
安土桃山	1586（天正14）	豊臣秀吉、絵師狩野山楽に紺青間歩の採掘権を与える ※紺青とは、鮮やかな青色の顔料のこと　第1次盛山期
	1588（天正16）	冷泉為満、多田銀山を見物
	1573～91（天正年間）	原丹波・淡路が瓢箪間歩の経営に当たる（瓢箪、台所間歩での採掘が盛んになる）
	1583～92（天正年間後半）	銀山広芝に陣屋を置き、奉行岸嶋伝内・川瀬八兵衛を派遣する
江戸	1660（万治3）	銀山町年寄津慶吉兵衛、大口間歩の誉田屋敷で銀の大鉱脈を発見
	1661（寛文元）	京都代官中村杢右衛門之重が銀山奉行に任ぜられ、役人６５人とともに銀山に着任　第2次盛山期
		銀山町柵内諸間歩が栄え、直山（幕府直轄鉱山）となる
	1662（寛文2）	瓢箪間歩の水抜普請を開始する（総工費は現在の約５億５千万円相当）　大坂口番所跡の発掘調査によって大坂口番所の様子が明らかになる →P.8参照
		代官所設置に伴う諸施設が整備される（建設費は現在の約９千１５万円相当）
	1664（寛文4）	多田銀銅山出銅高、最高を記録（現在の約４５３トン相当）
	1667（寛文7）	瓢箪間歩で大鉱脈が発見されるが、水抜普請に失敗
	1669（寛文9）	銀山役人の数が２２人に減らされる
	1676（延宝4）	大雨による大洪水で玄能池が決壊し、多数の間歩に浸水。犠牲者約１００人。
	1677（延宝5）	前年の大洪水の被害で稼行が困難となり、幕府直営（直山）から請負稼ぎ（山師経営）となる
	1682（天和2）	銀山奉行中村杢右衛門之重、職務不良のため追放・切腹させられる
		銀山役人の数が２２人から１２人に減らされる
		４ヵ所の口固番所廃止、役所縮小
	1683（天和3）	銀山役人の数が１２人から１０人に減らされる
	1685（貞享2）	銀山役所修復（実際は役所の縮小）
		銀山役人の数が１０人から５人に減らされる
	1688（元禄元）	山下町（川西市山下）に役所が設置される（銀山２～３人、山下１～２人、大坂１人）
		山吹が廃止され、銀銅の吹所は銀山・山下の２ヵ所に限定される
	1692（元禄5）	銀山役人５人、敷廻り５人で役所に詰める
	1705（宝永2）	不要となった建具の木材を用いて銀山役所を修復（実際は縮小）
	1721（享保6）	銀山、大坂代官の支配となる
		銀山役人３人、敷廻り３人、中間１人が役所に詰める
	1744（延享元）	不要となった建物の木材を用いて銀山役所を修復（実際は縮小）
	1768（明和5）	銀山町、人口３０９人（男１６５、女１４４）、家屋８６軒
	1772（明和9）	夏に平賀源内が多田銀銅山を訪れる
	1784（天明4）	多田銀銅山、大津代官の支配となる
	1808（文化5）	この年、多田銀銅山出銅高、史上最低（現在の約４８キロ相当）を記録
	1815（文化12）	銀山役所の建物他、書物・長持・古絵図・所道具などが焼失
	1820（文政3）	大津役所からの公費支給により、新役所が竣工
	1830（天保元）	秋山良之助、銀山役人として着任
	1840（天保11）	銀山町を含む川辺郡北部一帯の支配が摂津高槻藩に預けられる
	1858（安政5）	山師などの援助を得て銀山役所を修復
明治	1869（明治2）	銅山地役人の制、廃止（銀山役所の終焉）　代官所跡遺跡の発掘調査によって、この時期の代官所（役所）の様子が明らかになる →P.7参照
	1873（明治6）	『元鉱山御役所御払下ケ御願』が出される
	1875～87（明治8～20）	地元の山師が神戸の実業家関戸慶治の援助を受けて稼行する
	1887（明治20）	三菱が多田銀銅山の鉱区を買収する
	1897～1908（明治30～41）	島根の鉱山家堀藤十郎によって銀山周辺が稼行される
昭和	1944（昭和19）	日本鉱業（株）、鉱区買収
	1973（昭和48）	日本鉱業多田鉱業所、閉山

銀山地区のみどころ

悠久の館より北は道幅が狭いため、車の乗り入れはご遠慮ください。

銀山を訪れる際には

- 歴史街道や自然歩道は、土地所有者や地元の皆様のご協力により整備されていますので、植物や石などは持ち帰らないでください。
- 整備されていない間歩や建物跡は危険ですので、立ち入らないでください。

多田銀銅山

監修：井澤英二（九州大学名誉教授）
編集：猪名川町教育委員会
発行：平成２６年（2014）１１月
猪名川町教育委員会
〒666-0292
兵庫県川辺郡猪名川町上野字北畑１１－１
TEL（072）７６７－２６００
FAX（072）７６６－８９０４

PRINTED WITH SOYINK ™
このパンフレットは 10,000 部作成し、一部あたりの単価は 27.0 円です。